

中部の

エネルギーを 築いた



北海道稚内市増幌にある 福沢農場と福沢桃介

稚内市は日本最北端の宗谷岬、利尻・礼文島を望むノシャップ岬と宗谷湾に包まれた街である。

宗谷岬の広い丘陵地帯(この一帯は約1万年前に氷河期の凍結と融解の繰り返しにより波のようにうねる周氷河地形を形成)に広がる宗谷岬牧場、そして年間を通し吹き付ける風を利用した全部で57基の風力発電(出力:57,000kW)のウインドファームなどがあり、稚内空港近くの酪農地帯で知られる増幌地区が広がっている。

増幌の地名の由来はアイヌ語でマシュポバイ(鷗の舞うところ)から来たと言われる。1893(明治26)年に第1回の測量(海岸を基線としてケナシポロまでの地点)が行われ開拓者4名(氏名不詳)が入植した。そこでそれまでの記録が残されていない事から、この年を開基元年と定めた。125年余以前の増幌の原野はクマザサが深く生い茂り、昼なお暗い大森林地帯で開拓した先駆者たちの多くの苦労があった。

開基80周年を記念して拓魂碑設立委員会が結成され、1975(昭和50)年に増幌「拓魂の碑」が増幌コミュニティセンター横広場に建てられ、同地区にあった馬頭観音を合わせて祀った。碑の裏面には



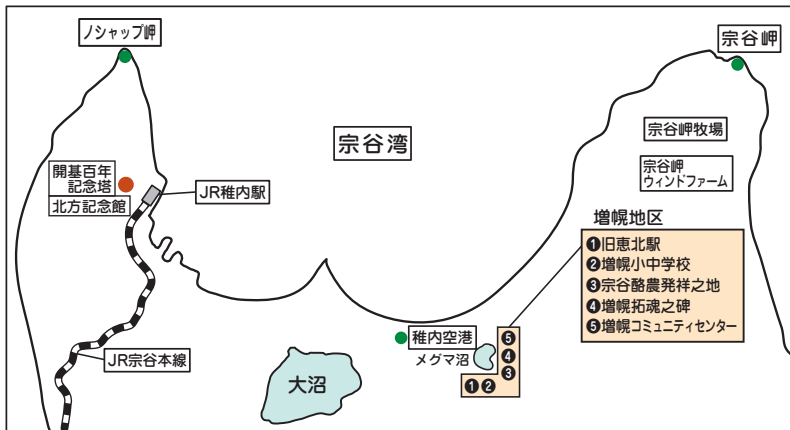
北海道炭鉄道株式会社制服着用 of

福沢桃介

1889(明治22)年から
1909(明治39)年まで勤務
出典:福沢桃介翁伝



次世代畜産経営を目指す広大な宗谷岬牧場



稚内市全体マップ

「増幌に開拓の鍬がふるわれてから80年の歳月を経て今日の隆盛を見るに至りました。往時を回想し感無量のものがあります。

現在乳牛の頭数は2千頭の大台にのり北海道の、いや我が国の食料基地としての役割を果たして居ります

此処迄に至る道程は先駆者の言語に絶する苦勞の数々と共に秋霜烈日をも厭わず黙々として我々を支えて呉れた牛馬は感謝にあまりあるものがあります。

此処に先駆者の偉業を讃え偲ぶと共に、家畜の靈に報い今後の増幌の一層の発展を期し此処に之を建立します。 昭和50年10月吉日」と記されている。

また、増幌開基100周年記念事業の一環として1997(平成9)年に「宗谷酪農発祥の地」の碑が建立された。

この増幌地区農牧場の歴史は、大農場主による開拓を促進する大地積下げによる畑作と牧畜業を目的としたことから始まり、農業開拓・酪農の夢を実現させていった。これらのことを事業として大きく展開していったのが福沢牧場であった。

1902(明治35)年、稚内市増幌に貴族院議員・

市島徳次郎が市島牧場、福沢諭吉と親交深い北海道炭鉱汽船社長・貴族院議員堀基が堀農場(福沢農場の前身)を相次いで開拓、さらに新潟選出代議士・大竹貫一が幕別(現：恵北市)に大竹農場を開拓していった。当時、農場・牧場のはっきりした区分けは見られず、いわゆる大農場主、大牧場主による農業開拓の始めであった。

堀基は1906(明治39)年、体調を悪くし東京に移住した。堀は緒についた開拓を捨てきれず福沢桃介に8万円で売った。桃介は譲り受けた堀農場を福沢農場と変え、場長に北海道大学農学部1期生の川又忠純を専務に迎え、北大から乳牛ホルスタイン種10頭を導入し酪農を始めた。

(資料1：堀基のプロフィール)

堀基「1844(天保15)年～1912(明治45)年」は、薩摩藩士で1868(明治元年)年、鳥羽・伏見の戦いに参戦、翌年、開拓使に移り同郷の先輩・黒田清隆長官と共に樺太に駐在しロシア交渉に当たった。1877年の西南戦争時には屯田兵を率いて従軍した。

1882(明治15)年、開拓使の廃止により実業界に転身、大有社(北海道初の商社)、北海道運輸会社(後の日本郵船の一部)を設立した。この間、札幌県令も務めた。

1889(明治22)年に北海道炭鉱鉄道会社を設立、初代社長に就任した。また、1891(明治24)年に北海道初の中学校北鳴学校(私立)を設立、教頭に新渡戸稲造を迎えるなど教育分野にも実績を残した。1894(明治27)年、勅選により貴族議員に就任。その後体調を崩し1906(明治39)年に東京に移住、1912年に東京で亡くなった。

牧場として出発して間もない1908(明治41)年8月に、福沢桃介と大竹貫一は、間宮丸で偶然に二人そろって稚内に来たと報じられている。福沢桃介は随員を伴って幌付四輪馬車で揺



増幌拓魂の碑
増幌開基80周年を記念して1975(昭和50)に建立



増幌コミュニティセンター
隣接して拓魂の碑、現在の増幌神社、
宗谷酪農発祥の地の碑がある

られながら増幌の農場に向かった。この馬車は、現在、稚内市北方記念館・開基百年記念塔に展示されている。

(資料2：華北毎日新聞の報道記事)

「明治41年 8月18日号
新潟県選出代議士大竹寛一氏及び農学士大竹温敦、熊谷渉の3氏昨日間宮丸にて来稚、大竹旅館に投宿せり」
「明治41年 8月21日号
福沢桃介氏来稚
東京三田の紳士福沢桃介氏は宗谷村増補路マスホロ牧場経営に付実地視察として去る17日来稚 1泊の上直ちに現場に向け出発したるが本日来稚の善なり」



北方記念館・開基百年記念塔(高さ:80m)の入口にある御料馬車

を手放したので、福沢農場が市島農場を買収して1,700町歩の大牧場主となった。

当時、開拓半ばにして農耕、放牧を放棄していったものが多い中であって苦難を乗り越え理想的な牛舎、サイロ、その他の施設を整え、真剣な態度で臨んでいった福沢牧場の果たした役割は大きいと考えられる。

今月号は電力事業以外に報告されてこなかった北海道時代の福沢桃介の功績と稚内市増幌地区での福沢農場の事業内容を紹介する。

北海道開拓使の酪農

1 ホーレス・ケブロンが開拓使顧問に就任

1871(明治4)年に北海道開拓使の黒田清隆が欧米に外遊のあり、当時米のグラント大統領に会って、だれか北海道開拓に当たって指導してくれるアメリカ人を派遣してほしいと要請した。

グラント大統領はアメリカ農業の最高責任者である農商務長官ホーレス・ケブロン氏を派遣すると返答した。なぜケブロン将軍が位官をなげうって日本に来ることになったのかなど、この人選が日米交渉史の中で謎だといわれるのである。そして来日し北海道開拓使顧問に就任、大規模な開拓事業が計画された。

その内容は ①鉱物資源の精密調査とその開発 ②道路・港湾その他交通連絡船の建設 ③都市計画・住宅・食糧問題への献策 ④開拓事業に当たる中堅幹部養成のための開拓使学校の設置などであった。

2 エドウィン・ダンの牧場経営

1873(明治6)年にケブロンの熱心な懇請

に応じ、当時オハイオ州スプリングフィールドに住むエドウィン・ダンが牧場えり抜きの牛80頭を引き連れ北海道に来た。

その後、官営の真駒内、新冠の牧場でバター、チーズ、コンデンス・ミルクの作り方なども教えた。まさに日本に酪農の基礎を築いた恩人である。ダンは日本の牧畜の草分けとして活躍するうちに日本婦人ヤマコと結婚し永住した。その後、日本に残った一族には音楽家のジェームス・ダン(次男)、往年のピアニスト、ダン道子(ジェームスの妻)などがいる。

1882(明治15)年に開拓使が廃止されると官営農場は民間に移管され、優秀な技術が引継がれていった。

3 札幌農学校の設立

1876(明治9)年に札幌農学校が設立され、米国よりクラーク博士を招聘した。そして農業生に学資を与えて農牧業を伝習させた。その後1890(明治23)年、札幌農学校がホルスタイン種を輸入した。これが北海道における血統登録牛の始まりで、明治後期になって民間で輸入が行われるようになった。

宗谷地方における酪農の歩み

1 宗谷地方の酪農

宗谷地方の農業の始まりは、森林資源と広大な牧草地を活かした草地型酪農が主体で、試験的な牧畜、畑作を目的とした大農牧場であった。一般農業移民が本格化したのは明治末期から大正の時代にかけてである。また、明治20年代に稚内で乳牛が導入され、昭和初期にかけて広大な牧草地に乳牛を放牧した草地型酪農と馬鈴薯の混合経営が始まり、一応酪農の形態をとっていった。

2 宗谷酪農発祥の地の碑

北海道宗谷総合振興局発行の中に稚内市増



「宗谷酪農発祥の地」の碑
増幌開基百周年記念事業の一環として1997(平成9)年に建立
幌に「宗谷酪農発祥之地」が掲載されている。
この碑の増幌百年にわたる沿革史には次の
通り記されている。

(資料3：「宗谷酪農発祥の地の碑」の概要)

宗谷酪農発祥の地

平成9年6月吉日

増幌開基百周年記念事業協賛会一同建之

増幌沿革史

1893(明治26)年	第1回測量(海岸よりケナシホ口迄)増幌開基とする。開拓者4戸入植。
(文字不明)	市島氏、堀基氏、増幌に農場開設。乳牛百頭飼育。
1906(明治39)年	福沢諭吉氏娘婿、桃介しほり農場譲受け、福沢農場として再出発。
1906(明治39)年	福沢農場札幌農学校(現北海道大学)よりホルスタイン種10頭導入し基礎牛として改良増殖を図る。乳牛150頭飼育。
(文字不明)	福沢農場バター製造。東京、阪神方面並びに海軍水交社に出荷始まる。
1907(明治40)年	獣医福沢農場事務所開業。
1908(明治41)年	福沢農場、札幌吉田牧場よりホルスタイン純血種を導入、増殖。
1923(大正12)年	稚内市街地乳処理場、福沢牛乳販売。
1927(昭和2)年	一般農家、福沢農場より乳牛を購入、飼育始まる。
1929(昭和4)年	福沢農場、札幌塩野谷牧場よりポータージピーマン、月寒木村牧場よりエコーランド、クインピーブ導入。以後、純血種の改良に全力を挙げる。
1931(昭和6)年	田中弥一郎氏、牛乳分離機購入、産業組合事業として北海道製酪組合名寄工場へ輸送。
1934(昭和9)年	福沢農場、近代的牛舎建設、完成。一般農家の頭数50数頭となる。
1940(昭和15)年	雪印乳業幕別集乳所(恵北)を設置。
1943(昭和18)年	福沢農場、乾酪の製造始める。
1952(昭和27)年	増幌総合開発実施決定
1953(昭和28)年	増幌で第一回家畜共進会開催。
1966(昭和41)年	酪農振興を図るため、混合農業より酪農専業に転換、逐次経営も大型化し、同年、農民組織の宗谷酪農民同盟を結成する。
1970(昭和45)年	稚内市声問、明治乳業完成。
1973(昭和48)年	宗谷農協、勇知農協合併。稚内農協となる。
(文字不明)	バルク・クーラー導入開始。
1977(昭和52)年	バルク・クーラー普及により、恵北集乳所を閉鎖。
(文字不明)	北海道営草地整備改良事業実施。
増幌開基百周年記念事業の一環として、この顕彰碑を建立す。	
平成9年6月吉日	

北海道時代の福沢桃介

1 北海道炭鉱鉄道会社時代の福沢桃介

福沢桃介は1889（明治22）年にアメリカ留学から帰朝後、福沢諭吉の2女・房と結婚、福沢家から分かれ一家を創立した。そして桃介は北海道炭鉱鉄道会社に就職し札幌に赴任、転居した。同年秋、東京支社が開設され、売炭係支配人として東京に転任した。翌年、房は長男を出生、短い時間であったが、桃介と過ごした札幌時代を振り返り駒吉と名付けた。東京支社時代は猛烈に働き販売実績を上げた。身分取扱は重役付けの支配人であった。ここで桃介は2回辞職し、3回にわたり北海道炭鉱鉄道で猛烈なサラリーマン生活を10年余り勤めた。

当時、北海道炭鉱鉄道は事業が鉄道と炭鉱の両派に分かれ、また、薩摩閥と長州閥の反

目もあり、さらに室蘭線夕張支線延長問題での責任を取り、1892（明治25）年に堀基社長が辞任した。後任に高島嘉右衛門（高島易断書著者の高島嘉平の長男）が社長に就任した。しかし高島社長は出炭量や社員の勤務成績（この時期桃介も一旦辞職に追い込まれた）を易断によって行ったりして混乱、さらに経営不振が続いたので、翌年、社長が解任された。

1893（明治26）年に井上角五郎が理事に就任、社長の実権を掌握した。そして、井上の秘書役として福沢桃介を任用し北炭内部の改革を実施した。

これ以降、桃介は外人相手に取引を行い、販売も会社の直売として利益を上げ、外国船をチャーターし東京、横浜までと北海道炭の販売が急激に増加した。さらに香港、シンガポールまで輸出する実績を上げていった。し

（資料4：福沢桃介の北海道時代）

西暦	和暦	福沢桃介の北海道時代
1889	明治22	北海道炭鉱鉄道に就職
1890	明治23	①北海道札幌に赴任・転居、 ②東京支社開設、売炭係支配人として東京に転任
1891	明治24	長男・福沢駒吉出生
1892	明治25	堀基社長辞任、後任に高島嘉右衛門社長就任
1893	明治26	①北海道炭鉱鉄道を一時辞任 ②経営悪化と室蘭線建設を巡る混乱で高島社長を解任 ③井上角五郎理事に就任（社長の実権を持ち、その後専務理事） ④福沢桃介を呼び戻し任用、以来13年間井上の秘書役として活躍
1895	明治28	結核療養のため、北海道炭鉱鉄道を辞職
1896	明治29	商法の施行に伴い北海道炭鉱鉄道株式会社に社名変更
1904	明治34	井上角五郎に勧められ北海道炭鉱鉄道株式会社に再就職
1908	明治38	民間企業で初の英貨債発行（100万ポンド＝1,000万円）
1909	明治39	①福沢桃介、北海道炭鉱鉄道株式会社を辞任 ②鉄道国有法に伴い北海道炭鉱汽船株式会社に社名変更 ③福沢桃介、北海道宗谷郡増幌の農場を堀基から譲受ける
1910	明治40	井上角五郎は日英共同プロジェクトして室蘭に日本製鋼所を設立
1900	明治41	福沢桃介、増幌の福沢牧場を初めて視察
1933	昭和8	福沢駒吉が福沢牧場を視察し牛舎、製酪工場の建設承認

かし過労で1894(明治27)年、横浜港で英国の石炭輸送船・膽振丸(たんしんまる=カアデガンシヤー号)を受取る甲板上で喀血した。すぐ北里柴三郎が開設したばかりの白金の養生園で3ヶ月入院した後、大磯で静養生活を送り、翌年、北海道炭鉄道を退職した。この頃から病気でも生活する方法がないかと考えたのが株取引であった。その結果、大金を儲けそれを元手に事業展開を図っていった。当時、世間では株取引は一攫千金をもくろむ山師の仕事とみられ、これらのことが一生涯、相場師としての虚像が付きまとうことになった。

1904(明治34)年、井上角五郎に勧められ北海道炭鉄道を再入社し、秘書室長の職名で井上の懐刀として活躍した。ここでは1908(明治38)年、わが国初の民間企業による外資導入、英貨債発行(100万ポンド=約1,000万円)に成功した。また1910(明治40)年、井上は日英共同プロジェクトして北海道炭鉄汽船株式会社と英国アームストロング・ウィットウオース会社、ピッカース会社の3社共同出資により日本製鋼所(資本金：1,000万円)を室蘭に設立した。

2 福沢農場の歩み

北海道宗谷地方における酪農の歴史は、増幌百年のあゆみの中で記述されているように福沢農場の開拓してきた役割が大きいと考えられる。

1908(明治41)年に1,700町歩の大牧場主になった福沢桃介は、始めて増幌を視察、場長・専務に川又忠純を迎え、翌年にかけて管理棟、管理人棟に付属して応接室、食堂、居間、洗面所などの丸太小屋を建てた。

当時から福沢桃介は電気事業経営に専念す

る多忙の身であり、牧場経営は現地に任せていた。そして初代の場長、川又忠純が辞任すると千葉県三里塚御料牧場から吉岡竹治が場長として赴任したが昭和4年に亡くなった。同年、同じ三里塚の吉岡通玄と続き、4代目の場長として1933(昭和8)年に木伏直作が就任した。木伏場長は1923(大正12)年からこの農場で働くベテランであった。

1933(昭和8)年に桃介の長男・2代目社長の福沢駒吉が増幌を視察した。駒吉は当時の天北線恵北駅から増幌小中学校を経て福沢牧場まで桃介が利用した御料馬車に乗車した。そして牛舎、サイロ2基、製酪工場の建設計画を立て、独立採算事業を目指した事業を展開していった。

これまでの福沢牧場の酪農事業を見ると

- ① バター製造—無塩バターとして樽詰めに
して海軍水交社へ納入、また紅葉印バター、ポプラ印バターとして京阪神の市場に出荷された。(明治末期頃)
- ② 牛乳販売部を設け稚内市内の牛乳店で販売。(大正13年頃)
- ③ 製酪工場を建設しゴータチーズを製造販売。(昭和9年)

などを手掛け経営改善を図っていった。

今回の調査に当たり、北海道宗谷振興局産業振興部農務課、稚内市教育委員会北方記念館・開基百年記念塔、稚内市立図書館など地元の皆様から貴重な資料、お話しなどの提供を受けました。

ここに厚くお礼申し上げますと共に掲載内容など不備な点が多々ありますので、ご指摘いただき今後の研究に生かしていきたいと考えております。

(寺澤 安正)